

## 第四章 フェアルビスの戦姫

戦姫はご機嫌ななめだった。

無影流の道場。

磨き上げられた板敷きの上に、連子窓をすり抜けた朝の陽光が縞模様を描きだしている。

リリカ・アムニーナ・エル・ラピスラズリ。それが、戦姫の真の名であった。

戦姫こと、リリカ・アムニーナは、いつものように真つ白な道着に身をつつみ、道場の中央で端座、瞑想している。しっとりとした艶のある黒髪を背中へと流し、その先端を紅いリボンできりりと束ねているのもいつも通りのことだった。

瞳の色は黒。凜としていながら魅力的で、ときに神威さえ感じられるほど強い光を放つかと思えば、慈愛に満ちたやさしさにあふれる。そんなクルクルとよく変わる表情を持った瞳をしているのは、彼女の心をいつもそのまま映しだしているせいなのかも知れない。

黒い髪と肌の白さ、そしてきわだつて紅い唇。そのコントラストが、見るものに彼女の容姿の美しさを強く印象づける。からだの線は大人びているが、生来の童顔とゆつたりとした道着のせいで、いまはいくぶん幼く見えた。

はつきり言つて、レグルスにはもつたいないぐらいの美少女だが、何故か彼女はレグルスの許婚としてこの世に生を受けていた。

キャロルシードで無影流と人気を二分する流派、衝破翠皇流の跡目を継ぐべき長女として生まれたまではよかつたが、双方の母親が親友同士で、性別の違う子供ができたら娶せることをかたく誓い合っていたのが運の尽きだった。

この世界では、男女の人口比に著しい偏りがあるため、一夫多妻がごくふつうの結婚形態となっている。それゆえ、複数の妻をめとることのできるレグルスにとつては、許婚の存在など、それほど気にするようなことからではなかつたのかも知れない。

だが、女性であるリリカの側からすれば、じゅうぶんすぎるほど、大きな問題であつた。

物心がついたところから親に言い聞かされていたせいもあり、幼い子供のころは、将来レグルスの妻になるということに何ら疑問ももたず、ただ無邪気によるこんでいた。

だが、学校に上がったところから、古風な考えをもつ親への反発やクラスメートのやっかみなどが原因で、レグルスに対してわざと冷たい態度をとるようになった。

たとえば。

……そう、たとえば親同士が決めた許婚であったとしても、おたがいに心から相手のことを好きになれたのなら、問題にはならない。

そして、長じるにつれリリカの側に問題はなくなった。

ミアネージュがふたりの前に現れたことにより、それまで胸の奥深くに無理やり封じ込めていたレグルスへの想いに気づかされたからだ。しかし、恋愛ごとに關してはまるで奥手のレグルスが、そんなリリカの心の変化などに気づくはずもなく、彼女をイライラさせることが多くなっていた。

「レグルスの、ばか……」

とうとう彼女の口から、そんなつぶやきがもれた。

昨日の早朝、リリカはいつものように出稽古でけいこに来たのだが、レグルスはそのにいなかった。約束をすっぱかされたことなど、ついぞなかっただけにショックを受けた。心配になって、昼ごろミアネージュの家を訪ねてみたが、彼女も留守でどこに行ったのかわからない。疑いたくはなかったが、あらぬほうに想像が働いてしまう。

「あたしを最初の妻に迎えてくれるって、約束したのに……」

幼いころに交わした指切りの情景がふいにフラッシュバックし、まるでつい昨日の出来事のように思いだされる。

と、そのとき。

リリカは、ふと気配を感じて目をあけた。

「レ、レグルス！」

かたわらに置いてあった木刀を手にとり、あわてて立ち上がる。

なにげなくつぶやいてしまった言葉を、聞かれてしまったのではないかとの思いから、頬ほおが真紅に染まる。

「ごめん、きょうはちよつと遅刻しちゃったな」

そこに立っていたのは、いつものレグルスだった。リリカの白い道着とは対照的に黒の袴はかまに濃紺の道着といういでたちで、使い込んだ木刀を左手に提さげている。

「あ、うん……」

こんなとき、少しまえのリリカならその喉のどもとに木刀を突きつけ、眉まゆを吊つり上げて遅刻の理由を詰問きつもんしていたことだろう。

だが、いまの彼女には、そうするだけの勇気がなかった。

「レグルス」

「えっ？」

「きのう、どこに行ってたの」

澄すんだソプラノをわずかに震ふるわせて、リリカが尋たずねた。

「ど、どこって……」

「ミアも一緒だったんでしょ？」

その声に、ほんの少しだけ拗すねたような響ひびきがまじる。

「ち、ちがう。ミアがかってについてきたんだ」

「かってについてきたってことは、やっぱり一緒だったんじゃない！」

「うっ……」

どんっ。

床ゆかを木刀の先で突き、リリカが訊きく。

「それで、どこに行ってたの？」

「だから……」

リリカの視線をまっすぐに受けとめられず、レグルスは観念したように白状した。

「ファーナの森」

「ふうくん、ファーナの森でデートしたんだ。あたしとの約束すっぱかして」

「だから、ちがうって。ファーナの森が目的地じゃなくて、俺はあくまでもファナの神殿を目指してただけど、途中で思わぬ邪魔が入って……」

「……………」

「何だかわかんないけど、いきなり魔族が襲おそってきて計画がばあになったんだ」  
ぱんっ。

レグルスの頬が鳴った。

「うそつき」

レグルスの言葉に嘘はなかったのだが、およそ真実らしく聞こえなかったのも事実だった。襲ってきたのが魔族ではなく、魔獣だと言っていたなら、おそらく頬を張られるという最悪の事態は避けられたことだろう。

「だあーっ、もうっ」

自分の身に起きた出来事などを、順序立ててきちんと説明していくのが苦手なレグルスは、言葉による説明を放棄した。

『言っておくが、俺は嘘なんかついてないからな』

そう思念波で力強く言いきられ、リリカはびくっとなった。

『今から、きのう何が起こったのか包み隠さず教えてやる。だから納得しろよ。いいな』

そう前置きして、レグルスはきのう自分が体験した出来事を圧縮した思念の波に乗せ、リリカに送った。

「えっ？ なっ……」

いきなりレグルスの記憶が頭の中に流れ込んできたので、リリカはパニックを起こしかけた。が、すぐに平静を取り戻すと、目を閉じてレグルスの思念波に、自身のそれを同調させる。

「……………」

まるで、自分がレグルス自身になったかのような錯覚とともに、きのうという過去をごく短い時間で追体験する。

リリカは、しばし茫然としていたが、やがてその目に光が戻り、静かに首を垂れた。

「もうっ、なさけないわね」

「何？」

「ブレスアビリティの魔法までかけてもらったのに、負けちゃうなんて」

「ぐっ」

痛いところをつかれレグルスが言葉につまる。

「あ、あれはだな……………」

「瞬間移動さえ使えたら、負けはしなかったって言いたいんでしょ？」

「そ、そうさ」

「その自信の根拠が、いったいどこからくるのか教えてくれない？」

「ちっ。わかったよ。ついてこい」

「え？ あっ、ちよっ、ちよっ、どこ行くのよ」

レグルスはリリカの腕を掴むと、そのまま瞬間移動した。

波音が耳朶に触れ、海をわたってきた初夏の風が微かな潮の香りを運んでくる。かなりの距離を跳んだらしく、太陽はすでに中天にかかっている、圧倒的な日射しの渦に眩暈をおぼえそうなほどだった。

目の前に広がるは、紺碧の海。そして晴れわたった蒼穹。

レグルスがリリカをともなつて降り立ったのは、切り立った断崖に囲まれた絶海の孤島だった。

島のかなりの面積を天を衝いて伸びる巨木の森が覆っている。が、奇岩の立ち並んだ島の一角に、ほどよい広さの岩床があった。

実際そこに裸足で立ってみると、まるで、何もものが平らに削りだしたのではないかと思えるほどなめらかで、足の裏にあたたかなぬくもりすら感じた。

「レグルス、ここは？」

「俺の秘密の特訓場、ってところかな」

まるで秘密基地を披露する子供のような表情で、レグルスが言った。

「ふう〜ん、ここで奥義の練習とかしてたんだ」

「我流の奥義だけだな」

「そっか、レグルスはまだ奥義、教えてもらってなかったんだっけ」

「ああ。けど、そのおかげで、それなりに凄い技を体得できたんだから、よしとするしかないだろ」

リリカが、瞳を輝かせてたずねる。

「で、その我流奥義っていうの、見せてくれるんでしょ？」

「特別だからな」

「秘密はきっちり守ってあげるから、安心していいわよ」

にっこり笑ってリリカが言う。

「じゃあ、ちよっと手伝ってくれるか」

「いいわよ。どうすればいいの」

「まず、氷柱をつくってくれ。径けいはそれほど太くなくていいけど、長さは二メートルぐらい。それから……」

リリカはレグルスの注文どおりに人の背丈せたくほどの氷柱をつくり、それを宙に浮かべたまま結界で覆おおった。

「これでいい？」

「ああ。じゃ、ちょっと下がっててくれ。できれば俺の後ろで見えてくれると安心だと思う」

「わかったわ」

言って、リリカは氷柱をその場にとどめたまま、レグルスの後方に下がった。

レグルスは、氷柱とやや距離をとり、木刀を一振りして構えをとった。

その様子を後ろで興味深く観察していたリリカだったが、はっと気づき、あわてて質問する。

「レグルス、まさかとは思うけど、木刀で奥義を放つつもり？」

「ま、何とかなるだろ」

視線を前方に据すえたまま、レグルスが答える。

「なんとかって、いったいどんな奥義なのよ」

リリカは呆あきれたような表情を浮かべ、レグルスの背中を見やった。

「だいたいわかるだろ。結界の中の氷柱をこの位置から斬きる！」

「木刀でそんなことができたら、拍手喝采はくしゅかつさいしてあげるわ」

レグルスはリリカの言葉を無視して、無造作に木刀を振るった。

次の瞬間。

ピキッ。

小さな音をたて、直径十センチほどの氷の柱は、その中央付近でいともあっさり切れてしまった。

「うそ……」

信じられないといった感じで、リリカがつぶやく。

レグルスは、ふり返って白い歯をみせた。

「これが、我流奥義の基本技だ」

「基本技、なの？」

「ああ。次に中難度の技をみせるから、もういちど協力してくれ」

「中難度？ っていうことは、さらにその先があるってこと？」

「まあ、そうなんだけど、最終奥義のほうは未完成なんだ。もっか特訓中だから披露はできないけど」

「そう。ちよつと残念だけど、しょうがないか。最終奥義、早く完成するといいいね」

「努力するよ」

言ってレグルスが苦笑する。

リリカはふたたび氷柱をつくり、その周りにルーンシールドを張りめぐらした。「今度は、俺が技を繰りだすタイミングを見はからって、その氷柱を瞬間移動させてみてくれ」

「あ、そっか……」

リリカはこれからレグルスが放とうとしている技の意義に気づいて、こくんとうなずいた。

「戦ってる相手もバカじゃないんだから、魔法剣を放とうとしているって気づいたら、結界を張るだけじゃなく瞬間移動で避けるってことも、とうぜん考えるわよね」

「そういうこと」

レグルスがふたたび構えをとる。

「いくぞ」

「うん」

レグルスの声に、リリカが応えた。今度は自分にもそれなりの責任が生じたので目つきが真剣だ。

レグルスのからだがかわずかに沈み、木刀が弧を描く。

一閃。

同時に、結界を纏ったまま氷柱がその場から消え失せた。

レグルスから、方角にして九十度、仰角にして四十五度、距離三十メートル以上は離れた場所に、それは出現した。が、その刹那、ふたたびまっぴたつにされてしまう。

「どうなってるのよ、いったい」

奥義のからくりがわからず、思わず声が大きくなる。

木刀を肩にかついでふりむき、とんとんと、その木刀の背で軽く肩を叩きながら、レグルスが言った。

「そこまでは、さすがに教えられないな」

「なによ。教えてくれたっていいじゃない。レグルスのけち」

リリカがくちびるを尖らせる。

レグルスは肩をすくめ、強気の取引を申し出た。

「リリカが翠皇流の奥義、残らず教えてくれるって言うんなら、考えないでもないけど」

「なっ、そんな条件じゃ、ぜんぜんわりにあわないわよ」

「しょうがないな。じゃあ、俺が無影流の奥義を伝授してもらったら、のこさずリリカに教えてやるって約束するから」

「えっ、いいの？」

「かまわないだろ。どのみちリリカは、俺と将来……」

レグルスは、あわててその先の言葉をのみこんだ。

「……………」

リリカの頬が、みるみる紅くなっていく。

お互いに意識しあって、あわててそっぽを向きあい会話がとだえる。

そのまま数分が過ぎ去った。

ふたりとも純情なので、こうなってしまつとなかなかもとには戻らない。

沈黙に耐えかね、先に口をひらいたのはリリカのほうだった。

「ね、ねえレグルス？」

「なんだ？」

すぐにいつも通りの反応が返つたので、リリカは安心して先をつづけた。

「技の原理、教えてよ。あたしも、翠皇流の奥義、教えてあげるから」

一呼吸おいて、レグルスが答える。

「原理なんて、きわめて簡単なんだ。真空波を飛ばして、それを結界内に瞬間移動させるだけなんだから」

「……………」

技の原理があまりにも単純だったせいか、しばし固まるリリカ。



「も、もしかして、それだけ？」

「ああ、それだけだ」

にべもない言葉が返る。

「なんか、あたしにもいますぐできそう」

「じゃ、やってみる？」

さつきとは逆に、今度はレグルスが氷柱をつくり、それを見えない結界で覆う。そして。

リリカは、技のイメージを頭の中で何度となく反芻し、ゆっくりと構えをとった。

「いくわよー！」

気合いを入れ、赤檜の木刀を一閃した。

瞬間。

ヒュンという唸りとともに真空の刃が生まれ、虚空を翔破した。

だが。

「あ、あれ？」

リリカが首をひねる。

彼女の放った真空波は、瞬間移動させる間もなく結界にあたって消滅してしまつたのだ。

「い、いがいと難しいわね」

「まあな。この技の最大の欠点は……」

リリカが人さし指を立ててレグルスの言葉をさえぎり、言った。

「間合いが近すぎると、瞬間移動がまにあわないってことでしょ？」

黙ってうなづくレグルス。

「あたしも、いま気づいたわ」

今度こそきめてやろうと、リリカが構えをとったそのとき。

「なあんだ、ふたりともこんなところにいたんだ」

突然、真上から声が降ってきた。

声の主はもちろんミアネージュである。

きょうのミアネージュは髪をツインテールにまとめ、彼女にしてはめずらしく聖魔導士の正装である白いローブに身をつつんでいる。

「ミア、どうしてここがわかったの？」

「それはもちろん、このわたしが偉大なる大魔導士だからよ」

リリカの質問に答えながら、ミアネージュはゆるゆると宙を舞い降りてくる。

「なにが大魔導士よ。まだ見習いのくせに」

ミアネージュはリリカの言葉をとりあえず無視して、両手を横に広げ編み上げ靴の爪先をきちつとそろえて、

とんつ

と、ふたりの前に降り立った。

「魔導連にでも顔をだしてきたのか」

ミアネージュの服装を見て、レグルスが訊く。

「ま、そんなとこ」

そう答えたあと、ミアネージュは急に神妙な面持ちになり、話を切りだした。

「きょうは、よくないニュースを持ってきたの」

「よくないニュース？」

レグルスが眉を片方ぴくつと上げ、聞き返す。

「まさか、また魔族が襲ってきたとか」

「ううん、そうじゃないけど……」

「じゃあ、なんだよ」

「……うん」

ミアネージュはちらつとりリカに視線を振り、すでにレグルスから事情を聞いて話の全貌を理解しているものと判断し、先をつづけた。

「ファーナの神殿が閉鎖されたんだって。森の中は警備の魔導士でいっぱいみたい。ほかの神殿も、似たようなものらしいわ」

「そっか……。けっこう大変みたいだな」

「どのくらいで警戒態勢が解除されるのかわからないけど、しばらくは神殿に近づくとすらできないでしょうね」

小さく嘆息して、ミアネージュが言葉を継ぐ。

「今度はリリカも誘って三人で挑戦しようと思ってただけど、残念だわ」

「……………」

落胆ゆえの沈黙が、しばし続いたあと。

「確かにちよつぱり残念だけど、あたしたち、まだまだ知らないことたくさんあるし、修行のほうも中途半端でしょ？ だから、そんなにあせることないわよ」  
リリカが誰にともなく言い、その話はそれで終わりになった。

フアーナの神殿。

その最下層にあるクリスタルの間。

そこは漆黒の闇に包まれた静謐が支配する世界。

祭壇の中央ではのかに金色の光を放つ六芒星の魔法陣。

その中心にあつて、虚空に浮かび、ゆっくりと回転しているのが、十二神柱のイリス。この世界の魔法を秩序あるものにし、そのすべてを管理している巨大なクリスタルのひとつだった。

人間は自らの遺伝子に手を加えることで、生命体として究極の進化をとげた。思念の力ひとつで新たな宇宙を創造することもできれば、時空を越え、はるかな世界を旅することもできるようになった。

だがそれは、まだ物事の分別がつかないほんの小さな子供にも、惑星の一つや二つ造作もなく消滅させてしまえるような危険な力を与えてしまった。ということをも意味していた。

人は、完全なる精神性を獲得しないうちに、個人で持つにはあまりにも大きな力を手に入れてしまったのだ。

かくて、人類は自らの強すぎる力を縛る枷を創りだした。

それが、十二神柱という名の十二のクリスタル。

いわば人造の神だった。

それまでは、思念の力を使うのになんの制約もなかったが、十二神柱というシステムができあがって後は、呪文の詠唱という手順が必要となった。それにより、幼い子供や精神的に未熟な者の突発的な発作による力の暴走など、不慮の事故による惑星規模の災厄はなくなった。

しかしそれは、この世界に住むすべての者の総意ではなかった。

なかには、十二神柱というシステムに対し、反発をおぼえるものもいた。特に星の海をさすらうことで邂逅し、共生するようになった他種族において、その傾向はよりいっそう顕著だった。

何より、自身の本来もっている力に制約が生じるのを嫌ったのが、真竜族だった。

対立が起き、銀河を二分する勢力同士の、壮絶な戦いとなった。が、それも今は過去の話である。

平和が訪れ、システムは安定した。  
しかし。

ファーナの巫女ファンネリアは、クリスタルを目の前にひとり悩みつづけていた。

何故？

そう思った。

何故、先人たちは、こんな融通ゆつうのきかないシステムを創り上げてしまったのか。融通がきかない。

そう、このクリスタルは、まったく融通がきかないのだ。

人間以上の知能を持ち、善悪の判断ができる。何が正義で何が悪かを、明確に理解している。それでいて、自己を滅ぼそうという者が現れても、これを排除はいじょしようとはしない。人の世で起きていることをすべて知りながら、けっして干渉はしない。たとえば、大陸が灰燼かいじんに帰し、多くの犠牲者が地を埋めつくすことになっても。

あの後あと。あの魔族の男が何らかの理由で戦いを中止し、時空の彼方に消え去ったのち。ファンネリアはレグルスとミアネージュの両名から魔族の少女との一件をくわしく聞き、きもを冷やした。

首輪に刻まれた極大呪文により、ファーナの神殿はおろか、キャロルシードさえ消滅していたかもしれないのだ。

だが、それが分かっているながら、クリスタルは何も行動を起こさなかった。

たしかに……。

ファンネリアは思いをめぐらせる。

自分の人生は自分で切り開いてこそ、感動が生まれる。生きている喜びや実感がわく。

常に、なにものかに守られ、やり直しすらきく人生など、おもしろくもなんともないにちがいない。

だが、ある日突然、生そのものが終わってしまったら、意味がないのではないか。それが、そのものたちの宿命だったのだ、と、いつてしまえばそれまでだが。ファンネリアは考えつづけた。

神殿を守り、クリスタルを守ることに以外に、何が自分にできるのかを。

「ロゼファイヌ、ただいま参りました」

ロゼは毛足の長い絨毯の上に片膝をつき、頭を下げた。

アズラエル城。

謁見の間。

薄紫と銀を基調にした鮮麗で典雅な造りの広間である。

採光用の窓はなく、意匠を凝らした王家の紋章が壁を飾り、魔法光によって床下からライトアップされている。

警備上の問題からだろう、かなり広い部屋にもかかわらず、死角が生じるような列柱の類は一切存在しない。

ロゼが頭を垂れている相手は、リグファントムの事実上の支配者にして、ロゼの実姉ラフィーリアである。

女王然とした緋色のドレスから惜しげもなく白い脚を晒して高く組み、ゆつたりと椅子に背をもたせかけている。

一段高くなった玉座の左右には、四天王のうちの男女二人、剣士のヘルワークと、魔導士のオルトレーゼが、脇侍のごとく守護の任についている。

だが、身内であるはずのロゼに会うのに、わざわざ謁見の間を選んだこと自体、異例であるといえた。

玉座の周囲をそれとなく固めている親衛隊の数も、普段より多い。

姉様が、あたしを警戒している？

ロゼがそう考えたとしても無理はなかった。

姉王ラフィーリアに呼びだしを受けた理由は推測がついていた。それ故、身につけるべき服もそれなりのものを選んだ。女王の妹姫としてではなく、使徒としてふさわしい闇色の戦装束を。

が、若干の不安は残った。

「呼ばれた理由は、わかっているようね」

冷やかなまなざしで、女王ラフィーリアは言った。

「申し開きがあれば聞きましよう」

「……………」

言いたいことは山ほどあったが、今はその時ではないと判断し、ロゼはあえて沈黙を守った。

ラフィーリアは、しばし間を置いた後、言った。

「顔を上げ、お立ちなさいロゼフィーヌ」

姉王の許しがあつて、はじめてロゼは面を上げ、立ち上がった。

「私たちには時間がない。それは、あなたも理解しているはずです」

ロゼは硬い表情のまま、わずかにまつげを伏せたが、首肯はしなかった。

ラフィーリアは豪華な椅子から立ち上がり、言葉をつづけた。

「革命前の世界で、呪文という鎖に縛り付けられたまま戦った経験のある私たちの世代しか、事を為しえない……。わかりますね？」

これからリグファントムに生まれてくるものたちは、あらゆる魔法を呪文の詠唱なしに使うことができるので、呪文を覚える必要はない。だが、十二神柱が存在する神人たちの世界で魔法を使うには、呪文の詠唱が必要となる。自在に魔法を使いこなすことのできないものたちに、異界での戦闘は不可能だということをあらためてロゼに思い起こさせるための、ラフィーリアの言葉だった。

しかし、ラフィーリアは驚きを持ってロゼの返答を聞くこととなった。

「お言葉ですが姉王様、私は、これ以上あの世界に干渉すべきではないと存じます」

「ロゼ？」

思わず姉妹としての顔をのぞかせ、ラフィーリアが問うた。

「命を救うために命を奪う……。本当にそれでいいの姉様？」

「……………」

「力によって為された革命は、いつかは力によって滅ぶ。それが歴史の必然だつて、あたしに教えてくれたのは、姉様じゃない！」

ラフィーリアの刺すような視線。

無言であることがもたらす、目に見えない圧力をはねのけ、ロゼは言葉をつづけた。

「その証拠に、レジスタンスの抵抗運動が、日増しに活発になってきてるわ。あたしは、これ以上血を流すのはもう嫌っ！」

ラフィーリアは、眉をひそめ、目を閉じて言った。

「レジスタンスの件に関しては、私も憂慮しています。が、歴史は動きました。もはや後戻りはできないのです」

「姉様っ！」

「革命は成し遂げます。私の命に代えても！」

決定した巖のような一念が、その瞳には宿っていた。

頑なともいえるほどの。

何が姉を変えてしまったのか。

ロゼにはわからなかった。

「ロゼフィーヌ、あなたには使徒としての自覚が足りないようですね」

ラフィーリアは、ふたたび霸王としての仮面をかぶり、氷のような微笑を浮かべて言った。

「もう一度……」

さらにラフィーリアが言葉を重ねようとしたそのとき、ロゼはミュートの魔法でその先の言葉を掻き消した。

場の空気が一変した。

近衛兵をはじめ、その場にいたすべての者たちの間に、言いようのない緊張が広がっていく。

人目のある公の場でのやり取りである。女王としてのラフィーリアの立場上、ロゼの行為は黙過できない。ただの姉妹喧嘩ではすまされないのだ。

だが。

ロゼは、胸に下げていた真紅の魔法石の中から、極大呪文の浮き上がった銀の首輪を取り出し、ラフィーリアの前に放り投げた。

「お返しします、姉王様！」

傲然とラフィーリアを見返し、ロゼが言った。

瞬間、ラフィーリアの顔がさっと強ばり、頬から血の気が引いていった。

「そう……そういう、わけだったの……」

苦悩と悲しみのまじった複雑な表情を浮かべ、ラフィーリアはつぶやいた。

その手が水平にすつと上がり、ロゼを指さした。

ロゼが、はっとしたときにはすでに遅かった。

すらりと伸びたその肢体を包み込むように、巨大な水の固まりが出現し、水球の結界となって空中に浮かび上がった。

『姉様っ』

ロゼは、思念波を飛ばすとともに、水の牢獄から逃れようと瞬間移動を試みた。が、結界に阻まれ、抜けだすことはかなわない。

『裏切り者には、死の制裁が待っている。そう教えたはずよ、ロゼ』

『裏切ったのは、姉様のほうじゃない!』

『秘密を漏らそうとしなければ、魔法は発動しなかつたはず』

『だから殺すの? 何の罪もない人たちを巻き添えにしてまで』

しかし、ラフィーリアはロゼの言葉を黙殺し、逆に問いを返した。

『なぜ、ゼノンの後を追って異界なんかへ行ったの?』

『心配だったからよ。決まってるじゃない……』

『彼のことが好きだから?』

『くっ……ちがう……姉様、誤解してる……あたしは、ただ……』

そろそろ息が苦しくなってきた。ロゼは、水から直接酸素を作りだそうとしたが失敗に終わった。

死への恐怖が、ロゼの心をじわじわと這い上がっていく。

『姉様……この結界……』

『その中にいるかぎり、思念波以外の魔法は使えないのよ。諦めなさい……』

『ねえ……さま……。ほんとに、あたしのこと……』

ごぼつという音をたて、肺の中から空気が抜けだし、かわりに大量の水が流れ込んできた。

苦しきのあまり、ロゼは喉もとを手で押さえて背をのけぞらした。

燃えるような赤毛が、水中花のごとく、ふわりと広がり揺らめいた。

オルトレーゼが、ラフィーリアに進言したのは、そのときだった。

「陛下、もうそのくらいでよろしいではありませんか?」

ラフィーリアは、黒衣に身を包んだ女魔導士に一瞥をくれると、きびすを返し、玉座へと戻った。



出現したときと同様、何の前触れもなく水球の結界は消滅した。

床に投げだされたロゼは激しくせき込み、涙を流しながら肺に入ってしまった水を吐きだした。

「ロゼフィーヌ、あなたを使徒の任から解き、茨の塔に幽閉します」

ラフィーリアが、宣告を下したその瞬間だった。

玉座の真上の空間が、弾け、閃光がほとばしった。

オルトレーゼが、瞬時に魔法障壁を展開し、親衛隊が女王の盾となった。

が、敵の狙いは、ラフィーリアではなかった。

床の上に両手をつき、肩で息をしていたロゼの周りに、十数体の影が現れた。

人間ではない。

魔導に長けた者が造りだした、黒い霧のような生命体だ。はっきりとした実体はないが、人型をしている。

ロゼは危険を感じて咄嗟に結界を張ったが、ほとんど瞬間的に無効化されてしまった。

「ソイノチ、モライウケル」

影がロゼに殺到した。

「ロゼー！」

叫びつつ、ラフィーリアがロゼの傍らへと跳躍した。

刹那。

闇と光が正面からぶつかり合い、堅牢な王城を揺るがすほどの大爆発が巻き起こった。

「閣下！」

耳を聳する轟音と閃光が渦巻く中、オルトレーゼの放つ光弾が一体、また一体と、あやまたずに影を貫いていく。

「親衛隊、何をしているか！」

オルトレーゼの叱声が飛ぶ。

「閣下とロゼ様を命に代えてもお守りするのだ！」

だが、親衛隊は、無数に湧き出してきた新たな影により、身動きがとれずいた。

「ちっ」

オルトレーゼは、玉座付近で魔剣を振るっている四天王のヘルワグに向かって思念波を飛ばした。

『ヘルワグ、此处は任せたわ。私は、この影を生み出している術者本体を叩きに行く』

王城の遙か上空で寄り添いあう姉妹を、不可視の結界が包みこんでいた。

「ロゼ、怪我はなかった？ どこか、体の具合が悪いところ、ない？」

ロゼの頬にそっと手を当て、ラフィーリアがたずねる。

「へいきよ、姉様」

「そう、よかったわ」

ラフィーリアは、ロゼの頭をその胸に掻きいだき、囁いた。

「安心して、ロゼ。あなたはきつと、私が守ってあげる。誰にも傷つけさせたりしないから」

耳朶の中でこだまする姉の声には、確かに魂のぬくもりが感じられた。あたたかな心の波動が感じられた。

どちらの姉様が、本当の姉様なの？

ロゼは心の内でつぶやいた。

今、あたしを抱きしめてくれている姉様？

それとも……。